

仙台真田家の末裔による講演会（報告）

宮原 豊（9組）

2月27日（月）の夕方、朝日新聞“Re ライフ Festival”の最後を締めくくるプログラム
仙台真田家 13 代当主 真田徹氏による「真田幸村 虚像と実像～幸村の子女達～」と題する講演を、成澤文和君（4組）と一緒に聴いてきました。

仙台でも平成 21 年ごろから全国の「真田」に縁のある信州（上田・松代）、上州（沼田）等の人たちと一緒に NHK「大河ドラマ」の実現を働き掛けてきたそうですが、この日は昨年放映された「真田丸」の人気にあやかって 200 人を超える聴衆で満員となっていました。

仙台真田家については、今から 2 年半ほど前（2014 年 11 月 9 日）にも小生が投稿しておりますので、記憶されている方もおられると思います。真田徹氏は幸村から数えると 14 代目ですが、幸村の遺児を仙台真田家初代とすると 13 代当主に当たるそうです。我々と同世代の 1948 年、仙台市生まれ、福島大学卒業後、大手建設会社入社、退職後は歴史研究者として活躍。上田市観光大使も務めています



（写真：講演会案内から）

ドラマ「真田丸」の脚本の人物描写は実によく描けていて、実際にあんな感じだったのではないかと、聴講者の多くもドラマの場面を思い起こしながら講演を聴きました。「今であれば大企業に囲まれた町工場のおやじの真田昌幸は、横暴な大企業に対抗して、それはなかなか見事な生き様であったと言えるのではないかと評していました。徹氏は、斜めからちょっと茶化したりしながらも、愛すべき自分のご先祖様の生き様を軽妙に語ってくれました。

昌幸と幸村は関ヶ原で西軍が敗れ高野山に流されたのですが、そもそもこの「流され方」は実に奇妙で、家来 16 人を引き連れて 18 棟の武家屋敷からなる幽閉生活だったそうです。一説に、徳川は真田親子をおとりとして「不満分子の炙り出し」を狙ったのではないかとのことです。徹氏の描く、逆境の中の真田親子のたくましい生き方、精神力、あるいは無頓着振りは何より興味深かったです。徳川が 2 人を解放するとは考えられない状況なのに望郷の念が強く、昌幸は死ぬまで「俺はいつ上田に帰れるのか？」と言い続けるほど、へこたれない性格（よく言えば未来志向）であったそうです。松代の信幸（信之）に繰り返す無心をし、信幸は苦勞しただろうと想像に難くないです。

16 人の家来は昌幸に従って来たので、昌幸亡き後は多くの家来は九度山を去って行ったが、それまでは幸村は自由人で毎日遊び暮らしていて、時には和歌山辺りまで繰り出していた

らしいです。(名誉のために言うが) 信幸は幸村に劣らず武芸も達人だったが、むしろ政治家であったそうです。そのお陰で、松代真田家は名家として幕末まで続いたそうです。精力家の幸村は、「九度山で他にすることもないから？子沢山になった」と、数えると生涯に13人の子宝に恵まれたそうです(やるもんだね)。

そのうち子女5人(1男4女)が、大坂夏の陣の後に仙台の伊達家の重臣片倉家に匿われました。(文春も新潮もない時代によく調べ上げたものですが) 講演の最後に幸村と交わった女性達と子供達の相関図がスクリーンに映し出されました。メモする前に講演終了の時間となり、「それで今の自分がここに居ます」と結ばれました。(大拍手)

65期の埼玉県在住者を中心に年に2、3度の旅行を実施している「蕨の会」(成澤文和会長)は来る5月16日(火)~17日(水)に関西ツアーを計画中ですが、真田ゆかりの真田丸跡や高野山・九度山を訪ねるそうです。ツアー後の報告が楽しみです。いつか「蕨の会」で仙台真田家史跡巡りの旅を企画しようと、講演会后2人で飲みながら、盛り上がりました。

余談ですが、“Re ライフ”という高齢者向けのイベントで、主催者からのプレゼントの紙袋の中にペットボトルと一緒に紙おむつの見本が入っていました。講演開始後30分くらい経った時に前方が急に騒がしくなり、どうしたのかと思ったのですが、容態が急に悪くなった高齢者がいたようです。講師に近い場所でしたが、さすが真田?講師は慌てず騒がず淡々と話を続けました。そろそろ高齢者の仲間入り、我々も無理して周りに迷惑をかけないようにしないとイケませんね。

(2017年2月28日記)

同期新年会での筆者

